

「お手本どおり」の私から

南部中・2 漆畑 ひなの

自分を表現すること

私が一番苦手なこと

小学生とは違う

委員会で

誰にも思いつかないアイデアを出す友達と

アイデアを心の奥にしまつて

お手本に似た意見を出す私

美術部で

唯一無二の絵を描く友達と

お手本を見ないと描けない私

「お手本どおり」しかできない私

つまらない

「もつと自分を出せばいいのに。」

私だつてわかつてる

でも

失敗したら嫌だし

笑われるのは怖いし

ずっと安全な「お手本どおり」

そんな自分が嫌だった

小学生の頃に始めた習字

中学生になつて

行書が増えた

いつもの字を崩して書く字

滑らかで

すごく格好いい

うまく書きたい

心の底から思った

だからまた

「お手本どおり」になる私

その横で

すいすい書いていく友達

楽しそうに書く友達が

格好よく見えた

すごくいいなと思った

私が書いた字を

先生が見ると

大抵言われるこの言葉

「形は良いんだけど、勢いがね。」

「勢い」

いつも悩まされるこの言葉

迷わずに自分の字を書くこと

勢いよく書きたいけど書けない

私はいつも躊躇する

間違えるのが怖いから

だからずっと同じ字だった

ある日

先輩の作品を見た

その瞬間

私の体に電気が走った

お手本どおりではないのに

お手本より良い

書く場面もぱつと想像できる字に

私は圧倒された

初めて思った

「お手本を超える字が書きたい」

私の中で何かが変わった

そこから書く字が

劇的に変わったわけではないけれど

少しずつ

確実に変わっている

そしてそれは自分自身も

自分を表現すること

私が一番苦手だったこと

今でも苦手だけど

委員会で

思いついたままのアイデアを出してみる私

美術部で

ページの端に思いついた絵を描いてみる私

そして

そんな私を少し好きな私

少しずつ少しずつ変わっている

「お手本どおりの私」から

「お手本を超える私」に